

内発的発展における「場」のマネジメントに関する研究

— 島根県邑智郡美郷町を事例として —

A Study of the Management of “Ba” in Endogenous Development -A Case of Misato Town, Shimane Prefecture-

氏名 二上 拓真

指導教員名 中島 正裕

1. はじめに

我が国における内発的発展論^{※1}は、1980年代以降に農山村地域の発展及び再生過程を論じるにあたり適用され、理論研究が積み重ねられてきた。その一方で実践に向けた計画論的観点からの研究は数少ない。筆者は内発的発展の実践に向けては、如何にして地域づくりに対する住民の内発性を醸成し、発現していくかということが重要だと考え、経営学における「場^{※2}」の論理に着目した。「場」が機能すると人々の共通の理解を深め、学習活動により情報を蓄積し、心理的エネルギーを高めるとされている。内発的発展の実践においても住民の内発性を引き出す上で「場」の論理の援用は重要だと考えられる。

そこで本研究では、内発的発展の先進地域を対象に①発展プロセスの解明、具体的な地域活動における②「場」の検証及び③「場」の生成プロセスとそのマネジメントの検証を目的とする。

2. 研究方法

2.1 調査対象地の概要

研究対象地は、島根県邑智郡美郷町である。人口5,198人、高齢化率43.7%、林野率が9割を占める過疎高齢化の深刻な山間地域である。同町は1999年以降、形骸化した獣害問題を契機として住民の自主性を引き出しつつ、駆除イノシシの地域資源化(精肉・皮革製品など)に成功し内発的発展を遂げてきた。

2.2 調査・分析手法

目的①では文献調査及び行政職員等関係者に聞き取り調査を行った。目的②では町内A地域での1ヶ月の滞在による参与観察と、内発的な地域づくり活動の参加者に対する聞き取り調査を行った。「場」の検証にあたっては、中塚ら¹⁾の地域づくりのプロセスに「場」をあてはめた枠組み(図1)をもとに分析を行った。目的③では、①、②の結果を基に伊丹²⁾の「場」の論理を援用し、地域活動における「場」の生成プロセ

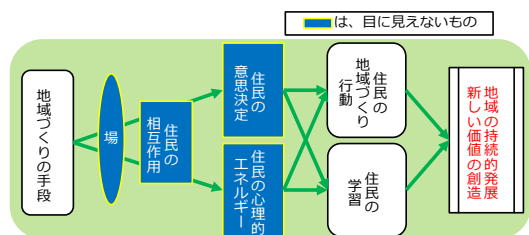


図1: 地域づくりのプロセスにおける「場」

スを解明し、生成のマネジメントの要件を考察した。

3. 内発的発展プロセスの解明

美郷町の内発的発展プロセスの詳細を解明した結果、5つのSTEP、19の細目に分類することができた。さらにその成果に基づき、STEPごとにステークホルダー間の関係性を解明し、キーパーソンを抽出した。

発展プロセス全体の中でも特に住民主体の内発的な地域づくり活動の展開がみられたSTEP4に着目する(表1)。このSTEPのキーパーソンは、町内A地域在住の行政職員Y氏、A地域婦人会長のK氏、農研センターの研究員で鳥獣害担当のI氏であった。

4. 青空サロン市場における「場」の検証

STEP4の中でも中心の活動となっている青空サロン市場(以下:青空市場)を対象に「場」の検証を行った。獣害に強い畑作りのための研修を実験圃場(青空サロン)で受け、被害防止に成功した住民の「収量増加分の野菜を売りたい!」との意向で青空市場(野菜の直売所)は立ち上げられた。毎週水曜に開催される同市場は、お茶のみ場としての機能も併せ持っていたが、次第に発展し、週ごとに担当集落の住民が料理を持ち寄るようになった。

青空市場における「場」を図1(既出)にあてはめた結果を図2に示す。青空市場で生まれる「場」では、参加者同士の自由で活発な“おしゃべり”の中で相互作用が生まれている。これにより、参加者同士の共通理解が深まり、獣害対策以外にも、地域や青空市場に関する情報が蓄積されることで、地域住民の豊かな暮らしにつながる意思決定や、次回の市

表1: 内発的発展プロセス (STEP4のみ抜粋)

STEP	細目
STEP4 住民主体の実験 圃場・直売所設立 (2006-)	[14] 獣害対策研修会の開催
	[15] 青空サロン(実験圃場)の設立 (2007)
	[16] 青空サロン市場(直売所)の設立 (2008)
	[17] 青空サロン2号店・3号店の設立 (2010・2014)

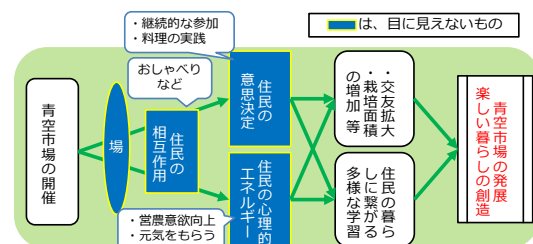


図2: 青空サロン市場における「場」

表2：「場」の生成のタイプ

	成立	設定	創発
萌芽	設定	設計される場	開花する場
創発	育成される場		自成一する場

場開催への意欲や日常生活への活力といった心理的エネルギーを生み出しており、青空市場において「場」が生まれ機能していることが考えられた。その結果、参加者個人で栽培面積を増やす、交友関係が拡大する、婦人会として青空市場の設備を向上させるといった変化をもたらすとともに、獣害対策に関する学習効果などを生み出し、青空市場の発展と参加者の楽しい暮らしへつながったと考えられる。

5 「場」の生成プロセスとそのマネジメントの検証

5.1 「場」の生成とマネジメントの概要

一般に、「場」の生成プロセスは【萌芽】と【成立】の視点から表2に示す4タイプに分けられる²⁾。

【萌芽】は少数の人間の議論を通して小さな「場」が生まれる段階であり、【成立】とは【萌芽】が育ち十分な機能を果たすようになる段階である。さらに、それらは他律的なはたらきかけにより『設定』されるものと、自律的な行動に基づく『創発』によるものがある。また、「場」の生成のマネジメントとは、生成プロセスにおける【萌芽】と【成立】を促すためのはたらきかけのあり方である。

5.2 青空市場における「場」の生成プロセス

STEP4の青空市場における「場」の生成プロセスとキーパーソンの動きを図3に示す。

青空市場における「場」が生まれる最初の段階は、表1における【14】の獣害対策研修会の開催である。ここではY氏の提案により、当時研究機関の鳥獣害担当であったI氏による獣害対策の講演会がA地域婦人会主催で開かれた。その後、講演会参加者からの「もっと勉強したい!」との声をきっかけにI氏による研修会がA地域住民の畑を使って定期的に行われるようになった。この段階が「場」の【萌芽】にあたり、Y氏によって『設定』されたといえる。

その後、I氏は研究事業の関係から、A地域へ実験圃場の設立を提案するとともに、研究機関として参加者に継続的な知識・技術移転を行うようになった。継続的な研修会は獣害対策を楽しく学ぶ基盤となると同時に、定期的に人々が集まり会話を楽しむ機会となっていた。その結果、多くの参加者が家庭での被害防止に成功し、営農意欲の向上から栽培面積を増やしていった。こうした成果がきっかけとなり、収穫した野菜を販売する直売所の設立案が参加者の間で浮上した。その提案は婦人会で承認され、地域の男性陣の協力によって直売所が設立された。そうして始まった青空市場は、これまで不足していた集落間の交流につながった。また、農業以外にも暮らしに役立つ多くの情報が交わされており、参加者の生きがいを増やしている。この部分が「場」の成立にあたり、参加者によって『創発』したものといえる。

以上より青空市場の「場」は、Y氏の働きかけに

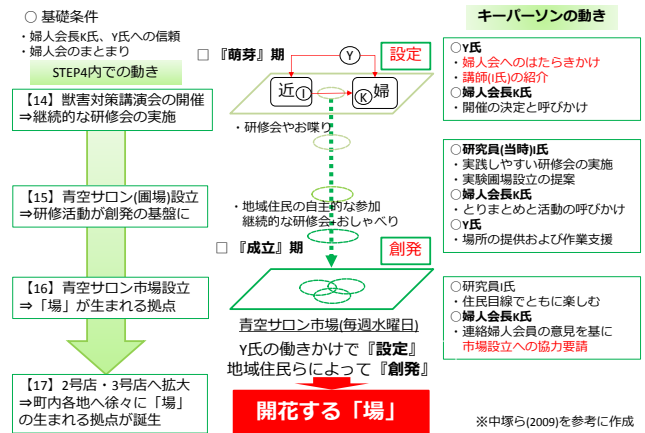


図3：青空サロン市場における「場」の生成プロセス

より『設定』され、参加者によって『創発』したことから“開花する場”に位置づけられると考える。

5.3 “開花する場”のマネジメントの要件

【萌芽】の『設定』は、①地域共通の課題を題材とする、②住民に寄り添い活動を進める、③共感できる外部者との連携④仕掛け人は脇役に徹する、の4点がマネジメントの要件としてあげられる。

【成立】の『創発』は、①I氏のように外部主体が住民との信頼関係を築きつつ活動し、楽しさを共有する、②K氏のようなリーダー格は調整役にまわり、参加者が自発的に動ける自由さを与える、の2点がマネジメントの要件としてあげられる。

さらに全体を通して、「場」が生まれるために青空市場のような拠点づくりを考慮することも、農山村の内発的な地域づくりには必要だと示唆された。

6. まとめ

本研究では、島根県美郷町の内発的発展プロセスの詳細を明らかにするとともに、「場」の論理を用いて地域活動の生成プロセスを解明し、生成のマネジメントの要件を提示した。今後はSTEP4以外の段階においても「場」の検証を行い、内発的発展における「場」の有用性に関する知見を蓄積していく。

注釈・参考文献

- ※1: 地域が必要に応じて外部の力との連携を図りながらも、住民主体で自律的に地域づくりを実践していくこと
- ※2: 「場」とは“人々がそこに参加し、意識・無意識のうちに相互に観察し、コミュニケーションを行い、相互に理解し、相互に働きかけ合い、相互に心理的刺激をする、その状況の枠組みのこと”であり、物理的な空間を示すものではない。伊丹(2005)
- 1) 中塚雅也・川口友子・星野敏(2009)：小学校区における地域自治組織の再編プロセス-「場」の生成の視点から-。農村計画学会誌, Vol. 28, No. 3, 135-140
- 2) 伊丹敬之(2005)：『場の論理とマネジメント』 東洋経済新報社 ※1は本書より引用